

会議名	畜産草地研究所・日本学術会議主催シンポジウム 「わが国における畜産技術開発研究と今後の発展方向」 栄養・飼養、飼料、管理・環境等について
開催日時	平成 19 年 7 月 25 日(水) 10:30～17:30
開催場所	つくば国際会議場（エポカルつくば）中ホール（茨城県つくば市竹園 2 - 20 - 3）
主催者	（独）生研機構 畜産草地研究所 共催；日本学術会議新畜産学研究連絡委員会
参加人数	約 190 名（出席者名簿別添）；講師 8、畜草研 69、公設研 24、大学 20、 元畜試 16、団体 17、畜改良セ 10、地域研 7、農水省 5、民間ほか
1. 会議の概要 （資料添付）	<p>わが国の体系的な畜産技術の研究開発が畜産試験場で始まって 91 年が経つ。その間、技会事務局の発足、独法化の流れの中で畜産業の発展を支える多くの技術開発が行われてきた。現在、食料自給の再認識と貿易自由化の波の中でわが国の畜産業大きな岐路に立たされている。この状況の下で、畜産技術研究の連携強化、重点化、効率化に資するべく関連大学、独法、公設研究機関の研究者が参集して、これまでの研究展開を総括し今後の研究発展について第 1 部をタテ系、第 2 部をヨコ系として論ずることを趣旨としてこのシンポジウムが企画された。</p> <p>当協会が行なうこの畜産新技術開発活用促進事業においても、畜産の現場で活用できる技術開発のために、広い分野の基礎研究を実用化技術に如何にして結びつけるかが大きな課題である。しかし、昨今の社会・経済的状況はこれを実現することが一段と困難になっている。この状況を打破する方策を探るべく収集した栄養・飼養、飼料、管理・環境等についての情報を報告する。</p> <p>1. 挨拶；畜産草地研究所所長（農研機構理事） 柴田 正貴； 祝辞；農水省技術会議事務局長（広報官代読）</p> <p>2. 第 1 部（講演会）；司会：松本 光人（畜草研企画管理部長）</p> <p>1) 基調講演 「畜産技術研究 90 年の歴史と将来への期待」</p> <p>(1) 国立研究機関における技術開発 ； 森地 敏樹（元畜産試験場長） 畜試創立期の活動、20 世紀における国研での畜産技術研究とその特徴 独法畜草研の研究成果と将来の期待。 20 世紀における畜試、草地試での技術開発の伝統を生かし、21 世紀の畜草研が日本畜産業の難問解決に寄与することと独創的な研究成果を生み出すことが期待される。</p> <p>(2) 大学における畜産学研究 ； 矢野 秀雄（学術会議会員、家畜改良センター理事長） 大学における畜産技術研究の展開：畜産学の動物科学、生命科学としての深化、COE 研究拠点の成立、アニマルウェルフェアや環境問題など社会のニーズに対応した総合的な研究開発、地域ニーズに立脚した地域振興の核としての研究の展開。 畜産業界の人材育成に果たした大学の役割：国内人材と海外留学生の育成供給。 今後の大学における畜産技術研究のあり方：民間、独法、公設研究機関との協力・共同のもとに、畜産業の革新を含めた新産業展開を支える人材の育成を。</p> <p>2) 専門分野における研究の展開</p> <p>(1) 家畜育種と畜産環境 最近の研究と現場での対応 ； 渡邊 昭三（元畜産試験場長） 家畜育種：（別途、花田参与が報告する） 畜産環境：堆肥化技術、廃水処理技術、臭気物質同定、環境負荷ガスの原単位策定、飼養システム研究。メーカーによる設計施工の標準化の方向。</p> <p>(2) 家畜・家禽の栄養管理分野における研究展開； 阿部 亮（元畜産試験場部長） 栄養管理の精密化：歴史と成果が紹介された。高い生産性達成に大きく貢献した反面、日本の畜産における地域特性を消滅させもした。 研究体制：畜試、地域農試、公立畜試、飼料メーカー、大学連携の輪の形成。 現在の関心事とその課題の今後の技術開発への継続：環境負荷低減、高位生産飼料素材の開発、飼料資源開発、特異的畜産物製造の栄養管理、栄養障害防止技</p>

	<p>術、アニマルウェルフェアへの配慮、プロバイオテックス、ニュートリゲノミクス、生化学との協調、家畜生産・飼料供給・消費動向など分野全体のレビューの実施。</p> <p>(3)繁殖分野における研究の展開;佐藤 英明(日本畜産学会理事長、東北大学大学院教授) (別途、花田参与が報告する)</p> <p>(4)草地学分野における研究の歴史と今後の発展方向; 雑賀 優 (日本草地学会会長、岩手大学大学院教授)</p> <p>飼料作物栽培の歴史:江戸時代まで、明治時代以降、第2次大戦後。 草地学研究の歩み:草地研究会、草地学会、国際草地学会の開催。 草地学研究の一例としてのエンドファイト研究の紹介。 草地学研究の問題点と将来方向:研究成果のデータベース化、研究環境の悪化(研究者と研究機関数、研究費、競争的外部資金、地方大学の軽視、現場対応研究課題の軽視、産業界とくに飼料輸入業者)。</p> <p>3. 第2部 パネルディスカッション 畜産技術研究の将来展開 司会;柴田 正貴(畜草研所長)</p> <p>(1)キーノートスピーチ:横内 園男(家畜改良技術研究所長) (2)パネリスト:講演者のほか、小林春雄氏(元草地試験場長)</p> <p>分野ごとに、話題提供者が第1部で述べた正史の外伝的な補足が司会の指名により求められ、座長、話題提供者との応答が行われまとめられた。時間的な制約もありフロアからの発言やディスカッションはほとんど無かった。</p> <p>4. 閉会挨拶; 矢野 秀雄 (学術会議新畜産学研究連絡委員)</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	<p>このシンポジウム開催の趣旨から、上記1.での論点がすべて重要と考えられるが、特に演者から各分野で示された問題が今後において重点化、重要視すべきものと言えよう。</p>
3. その他の発表課題で関心のあったもの	<p>専門分野の研究展開「2.2(1)」の「畜産環境」において演者は、堆肥化技術、廃水処理技術、臭気物質同定に関連した施設の開発は、公的機関とも協力しつつ、多くのメーカーが自力で設計施工し、技術格差による混乱も見られたが現場の評価を経て一応の標準化が確立されたことを紹介した。これには、畜産環境整備機構による指導と支援、法的規制の強化と公的資金の投入効果の大きかったことも否定できないだろう。しかし、このことは飼養管理関連の施設と機械の研究開発における現場主義と民間活力の重要性をよく示していると言えよう。わが国で畜産公害が指摘され始めて半世紀にも達しようとしているが、この間に家畜飼養管理設備・機械の開発のため無駄に費やされた研究資源と農家の設備投資を考えれば、他分野も含めて畜産用機械設備開発研究における他山の石として銘記されなければならないであろう。</p>
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	<p>栄養・飼養、飼料、管理・環境等の分野については、高栄養による高位生産における疾病防除、アニマルウェルフェアへの配慮、人間の健康に関連するプロバイオテックスやニュートリゲノミクス、分子生物学に踏み込んだ代謝、消費者意識と消費動向を見据えたもの、等が挙げられる。草地・飼料生産分野については土・草・家畜の系をつなぐもの、休耕地活用飼料生産(放牧、飼料用米)、グリーンツーリズム、等を重点視すべきと考えられる。</p>
5. 会議の所感	<p>元場長を並べたこのシンポジウムは旧畜試・畜草研90年にわたる歴史の自画自賛としては立派のものであった。しかし、視点が違うと言われればそれまでだが、食品としての畜産物に対する消費者意識とその上に立つマスメディアの関心は益々高まるものと考えられる。生産者向けの議論、仲間内の議論も大切であるが、わが国における畜産技術開発研究の今後を考える場合、消費者とマスコミに多大な対応を費やさなければならない行政や流通関連もタテ系にした議論も必要であろう。さらにまた、行財政改革の行方にも大きく関わるが、公設研究機関や家畜改良センターの行く末も視野に加えた議論も必要であろう。これらに関する学術会議シンポジウムの開催を期待したい。</p>
報告者	針生 程吉